



初雪の樽前火山のドーム

歩けど歩けどなお、我が調査終わらざり

Yoshiyuki Koide

小出 良幸

層や岩石を、図学的手法によって三次元的な空間分布を復元していく。地層や岩石ができた場所は、現在の崖がある場所ではない。たとえば、地層の中にアンモナイトの化石が見つかつたとしよう。そのアンモナイトを含む地層は、アンモナイトが生きていた時代には、海の底で溜まっていたことになる。それが現在、陸地の崖として、私たちの目に触れるのである。海底でできた地層が隆起して山となり崖となつたのか、それとももっと複雑な履歴をたどつて現在の崖になつたのかは、その崖や周辺の地質学的なデータから復元して明らかにしていくことになる。

地質学とは、地層や岩石から、三次元的に空間を復元するだけでなく、時間を遡りながら、現在に至つた履歴を、時空間として復元していくことである。地質学の野外調査とは、その時間空間的復元の基礎となる情報を得るためのものなのである。私が現在野外調査の対象にしているのは、北海道にある一三本の一級河川と一八座の活火山である。できれば第四紀と呼ばれる時代の九四座の北海道の火山まで調査をしたいと考えている。北海道の河川と火山の比較対象として、日本や世界の代表的な河川や火山も調査対象としている。

河川および活火山を中心とした北海道の自然史データベースを自力でつくろうと目論んでいる。このデータベースは私の研究用としてだけでなく、科学教育の一環として市民も利用できるようなものを構築したいと考えている。

当初、五年計画で野外調査を終了しデータベースを完成する予定であった。現在約三年半が経過して、北海道の一級河川一〇本、二級河川七本、活火山六

座、第四紀火山一座を調査し、データベースとして公開している。しかし、まだまだ調査不足のところも多い。この四年間、毎年四〇日ほど野外調査に費やしている。しかし、未だ完成にはほど遠い。

本州では、冬の方が野外調査には好都合である。夏と比べると、暑くないし、マムシや害虫もいなし、深い草むらも枯れて崖に近づきやすく、調査がしやすいのである。だから、本州では野外調査は、夏より秋から冬、春にするほうが効率的である。ところが北海道の冬は、野外調査には向かないのである。いや、不可能である。だから、北海道の調査は夏が中心となる。

私は、夏は北海道、冬は本州に出かけて、冬ごもりをする余裕もなくも、せつせと野外調査をしている。野外を歩けど歩けど、なお我が調査は、遅々として進まない。何億年に及ぶ大地の営みを調べているのだから、急いでもしかたないのだろうか。

北海道の冬は冬ごもりするしかない。そう思いながら、四度目の冬を迎えた。しかし、今年も冬ごもりもせずに、野外を歩き回っているのである。

私は地質学を専門として、野外調査を主な研究方法としている。地質学は、野外で山や川、海などの崖に出ている地層や岩石を詳しく調べていき、最終的に大地の生い立ちを探る学問である。

崖を点とすると、たくさんの点を集めて、二次元的な地層や岩石の分布図として地質図を作成する。地質図から、見えない地下や削剥されてなくなった地

2006年度入学試験結果

Table with columns for exam type (e.g., 一般A, B), year (2002-2006), and number of applicants/passers. Includes sections for 人間科学科, 英語英米文学科, 臨床心理学科, and 大学院臨床心理学研究科.

二〇〇五年度学位記授与式

第二十六期人文学部卒業生三〇七人に学士(人文学)号 第五期大学院臨床心理学研究科修了生二二人に修士(臨床心理学)号

二〇〇五年度学位記授与式が、三月二十四日、北海道厚生年金会館ホールで挙行された。第二六回を迎えた人文学部では三〇七人(人間科学科 一四三人、英語英米文学科 六一人、臨床心理学科 一〇三人)に学士(人文学)号が、大学院臨床心理学研究科二人に修士(臨床心理学)号が授与された。全学では学士号授与者一、一六二人、修士号授与者三〇人であった。これにより人文学部卒業生の総数は、五、四三三人(人文学科 三、五八六六人、英語英米文学科 一、六二〇人、臨床心理学科 二二七人)となった。

平成十八年度

教員採用候補者 選考の結果について

二〇〇五年度 臨床心理士 資格試験合格者

全国的に教員採用の高倍率が続くなか、今年度の採用検査で本学全体として七名が登録となった。このうち三名が人文学部出身であった。登録となったのは、人間科学科の瀬戸さやかさん(小学校、中野陽介君(私立高校)、夏野美穂さん(私立高校))である。瀬戸さんは四年次の二月から自己学習と予備校通いを始め、通信教育で小学校の免許取得を目指しながら、採用試験の準備も怠らなかつたゆえの登録であった。また、中野君は公立のみではなく私立学校の公募情報をこまめにチェックしながら栄冠を勝ち取った。さらに中野さんは、教育実習中の取り組みを評価され、私立高校での教員採用の情報を紹介され数ヶ月間の非常勤を経て採用されたものである。後輩たちにとっても参考にして欲しいものである。なお、今年度より「こども発達学」が開設され、小学校一種免許が取得可能となる。教職課程としても新学科と連携して質の高い教員の輩出に取り組んでいきたい。(富田 充保)

合格者名簿

- 臨床心理学研究科修了生 荒川 祐介・荒川和歌子 北澤 知華・佐藤博昭 杉岡 品子・中山智哉 能登 菜緒・原田ゆか 鷲見 彩・和田晃尚

臨床心理学研究科修了生

第五期生修士論文発表会

二〇〇六年三月に大学院臨床心理学研究科修了予定の一二名の修士論文発表会が二月十七日、B101教室で実施された。各人の修士論文のテーマは以下に示すとおりである。研究テーマ、分析手法とも多岐にわ

第五期生修士論文テーマ

- 細江真紀子 障害受容概念の再検討―精神障害者当事者に対するアンケート調査から―
- 浅利 猛 青年期における対人恐怖心性的研究―自己愛傾向と親の養育態度との関連から―
- 阿部 真之 青年期の精神的健康と家族イメージの関連性について―家族イメージ法を中心とした家族関係の質的検討―
- 大川 満生 アドラー (Adler) 理論から見た境界例心性の一考察―ポーターライン・スケール、ロールシャッハ・テスト、MMPPIを用いて―
- 大館 徳子 現代の思春期・青年期の居場所についての研究―不登校の居場所感の条件分析と自己像への影響について―
- 奥 玲子 「間を置く」技法を利用した怒り感情のコントロール―「される子」へのアプローチ―
- 川口 朋子 初回面接におけるセラピストとクライアントの主観的体験について―セラピストとクライアントへのインタビューによる質的研究―
- 工藤麻起子 空想と精神的健康の関連性についての研究―時間的展望の検討を中心に―
- 藤澤麻弥子 Jung のタイプ論について―対極性を仮定しない、量的および質的測定法の検討―
- 松崎 亮介 医療領域で働く心理士が受けるストレスと勤続年数による内的変化の研究―半構造化面接を通して―
- 森田 和洋 精神科医療施設における治療的環境に関する研究―協働体制が社会的風土に与える影響の検討を通して―
- 山崎 菜穂 中学教師と臨床心理士の、子どもの援助様式についての一考察―八名へのインタビュー調査による事例研究的アプローチ―

快挙

英語弁論大会出場者四名全員が受賞

二〇〇五年十一月五日に札幌国際プラザで開催された『札幌・ポートランド姉妹都市提携記念第三十七回英語弁論大会』に英語英米文学科・坪井主税ゼミナール三年生四名が出場し、全員が一位〜三位と特別賞を受賞するという完全制覇を果たしました。

大学一般の部には北海道大学(大学院生)、藤女子大学を始め八名が出場しましたが、審査の結果、坪井主税ゼミの三年生四名が上位を独占するという快挙を遂げました。出場した学生達は英語英米文学科専門ゼミナールで坪井主税教授の指導の下、「英語のパフォーマンスを通して、あなたという人間・あなたの個性を表現する」ということを目指して学修してきました。今回の快挙はその日頃の学修の成果と努力が輝かしい受賞に結びついたといえるでしょう。

受賞者と演題は次の通りです。



前列左から
二人目 大住さん
前列一番左 大野さん
前列右から
二人目 西中さん
前列一番右 岩淵くん

特別賞 (札幌青年会議所)
岩淵慎一郎
[My father and me]

英語英米文学科 半期海外留学

本学は、英語圏において英米豪の三カ国四大学に半期海外留学を実施し、主に英語英米文学科の二年生を対象に後期の期間、毎年学生を送り出している。本年度は二十名がプログラムに参加。内訳は、米国カリフォルニア大学デーヴィス校に四名(男女各二名)、豪国モナッシュ大学に十六名(男子六名、女子十名)。今後は男子学生のエントリーをもう少し期待したいところである。なお、半期海外留学の参加資格は一年次終了時に三十六単位以上の単位修得者であることの一点のみである。大学の支援体制は、年に三回学内で実施する英語試験の成績をもとに返還義務のない留学奨学金制度がある。本年度も四十万円から二十万円が二十名中十九名に支給された。英語英米文学科は、本プログラムを重要なカリキュラムとして位置づけている。継続は力なり、毎年地道に学生を送り出し、帰国後の学内カリキュラムにどう接合させるか、新カリキュラムの充実とあわせて検討中である。(岡崎 漣)

二〇〇五年度

卒業論文紹介

人間科学科

社会・福祉領域

本領域では本年度は五五人が卒業論文を提出した。本年度は七つのテーマ区分(「子ども」一三名、「健康・医療・福祉」八名、「家族と福祉」八名、「若者と結婚」六名、「文化」六名、「地域」七名、「若い」七名)を設定して発表会を実施した。

「子ども」には、養育、保育、教育といった諸問題へとりくんだ論文が集められた。ここでは荒川真司(松本ゼミ)「きょうだい構成の違いと性格印象に関する一考察」(副題は省略以下同様)、小林誉英(松本ゼミ)「子どもの成長に影響を及ぼす要因」、佐々木絢子(布施ゼミ)「ユニークなデンマークの教育」が高く評価された。荒川論文と小林論文は定量的研究と定性的研究という方法的な立場こそ異なるが、いずれも地道に収集された「データ」にもとづく実証的研究であり、佐々木論文は丹念な読解と記述にもとづく文献研究である。

「健康・医療・福祉」には、

広い意味での保健・医療・福祉領域の諸論文を集めた。ここでは道内初の薬物依存症患者のりハビリ施設「北海道D.A.R.C」をフィールドとした井上和也(新田ゼミ)「薬物依存症者の回復と治療の現状」、「偏見」、「差別意識」といった難題へ挑戦的にとりくみ、障害者施設建設反対運動の事例にもとづき丹念に考察された日置舞(新田ゼミ)「現代の障害への偏見意識を探る」、社会福祉専門職へのインタビューにもとづいて、かれらの主観的な意味づけのあり方に着目した中川郁美(松本ゼミ)「社会福祉専門職の力量形成の過程について」がなかでも高い評価を得た。

「家族と福祉」に集められた論文は力作が多かった。紙幅の都合もあり詳細については割愛するが以下で紹介する論文はいずれも、自ら収集したデータにもとづくものであり、高い評価を得たものである。小島優(布施ゼミ)「母子家庭が抱える問題」、井原野歩恵(新田ゼミ)「大学生の祖父母親、齋藤梨重(新田ゼミ)「介護負担感軽減における福祉用具の役割」、中村裕子(松本ゼミ)「貧困母子世帯

に対する社会意識に関する一考察」、竹中和子(松本ゼミ)「精神障害者の家族の現状と今後に向けての検討」、小畑聡子(松本ゼミ)「里親に対する支援のあり方について」。

「若者と結婚」では、近年の若者の就労をテーマにしたものと、未婚化、晩婚化という結婚に関わる問題に多くの関心が集まった。ここでは「母親の就労」に関する一九六〇年代以降の先行研究の整理とその緻密な読解にもとづく考察が展開した瀬越小百合(今後、共働きに求められる子育て)、いわゆる「負け犬論」への関心にもとづき日本の結婚および家族の歴史と現状を分析した廣中未来「負け犬は本当に「負けた」のか」(いずれも布施ゼミ)が高い評価を得た。

「文化」には、多様な関心とテーマにもとづく論文が集められたが、なかでも、日の丸に付与された意味の歴史的な変遷を丹念に再構成した佐藤歩子(新田ゼミ)「日の丸の歴史と現代的意味」が高い評価を得た。

「地域」には、さまざまな意味で地域の再生・活性化にかかわる論文が集まった。なかでも道内の地域密着型のFM放送局を比較考察した日沼みわ(湯本ゼミ)「コミュニティFM放送局の比較研究」、「地域共生」をキーワードとした岸田春樹(布

施ゼミ)「高齢者と児童、障害者がともに過ごす」ということ、ゴミ減量化をめぐる地域の取り組みを比較考察した川辺奈緒美(酒井ゼミ)「地域のゴミ減量化対策と「有料化」問題」はそれぞれ丹念に取り組まれた事例研究として高く評価された。

「若い」では、高齢者・高齢期にかかわるテーマ設定を行った論文が集められた。なかでも震災に関する先行研究をふまえた現地調査にもとづく井馬智彦(新田ゼミ)「災害から福祉を考える」、エイジズムを主題とし「笑い」を媒介とした相互行為の可能性を探った滝澤奈穂子(新田ゼミ)「「若いを笑い飛ばす」ということ」、そして、特定地域の老人会活動に着目し高齢者自身の生活と地域の活性化のあり方を論じた佐藤羽紗「高齢者の地域における余暇活動と生きがいに関する考察」が強く評価された。

論文執筆においては「問題」だけでなく、それに接近するための「方法」が不可欠である。本年度高い評価を得た諸論文は、総じて、この「方法」の面において安定感をもつものであったように思う。なかでも「学生らしく」だけでなく「学生にしかできない」ようなフィールドワークにもとづく論文は社会・福祉領域のもちあじのひとつである。

ろう。

(木戸 功)

心理・教育領域

今年度、本領域では、二月十三〜十四日の二日間に渡って卒業論文発表会が行われた。以下に、本年度の卒業論文の傾向・特色などについて、それぞれのゼミごとに紹介する(なお、文章はゼミ担当者が執筆したものである)。

小林好和ゼミでは、子どもの発達をはじめ、知識や技能の獲得過程、文章の理解に関する研究テーマが取り上げられた。鈴木はるか「子どもの『生と死』」の概念に関する発達の研究」では小学校一年生から六年生までの児童を対象とし、無生物を含むさまざまな対象について「生きていくか否か」の判断、生物が有する属性の付与について丹念な実験を行なったところ、一年生では「石、太陽、雲、テレビ」等を「生きている」と判断し、しかも個人内で一貫した傾向のあることを見出した。北野美智子「運動領域の熟達化の認知心理学的研究」では、短距離走(二〇〇m走)の「タイム」をいかに捉えるかについて調べ、競技歴五年以上熟達者になると、疾走の予測、及び疾走タイムの差の平均が〇・二三秒ほどであったのに対し、初心者

は一・四三秒であり、さらに「一般的なタイム一〇秒の予測」について調べたところ、両者の間に違いは無く、熟達者における疾走タイムの認知は領域特殊的な性格を有することを示唆するものとなった。さらに小林祥子「擬音語・擬態語を含む文章の解釈に関する研究」では「擬音語・擬態語」に関して読み手が極めて具体的な「補い(推論)」を施す実態を明らかにしている。

工藤ゼミでは、今年度も多様なテーマが選択されたが、従来見られなかった傾向のテーマを取り上げたものとして、夏野美穂「文字式」の理解を促す段階的指導に関する考察が挙げられる。夏野論文は、文字式の学習に困難を感じている中学二年生に対する、およそ三カ月間にわたる指導計画の構築と実践および評価の過程を対象としたものであり、いわゆる「事例研究」の部類に属するものである。データの統計的処理に頼る研究に比べ、一般化した結論を導きにくい点に事例研究のむずかしさがあり、夏野論文にもその点に難があることは否めない。しかし、実際の学習指導上の問題解決に資する知見を得るためには、既存の心理学概念を組み合わせるだけでは不十分であり、この種の事例研究による綿密な問題の掘りおこしが不可欠であること

は間違いないと思われる。

鈴木健太郎ゼミでは、人間の認識・行動とその発達について、実際の行動やその発達過程を詳細に見ることから理解することを目指した。身につけたものによつて日々変化する身体スケールと柔軟に適合する知覚能力について検討した黒田陽子「身体に延長の生じた自己による環境適応―通り抜けられる隙間のアフオーダンス知覚―」など、実験的手法を用いた研究が興味深い事実を見いだしていた。また、乳幼児間で同期する行動の観察からその発達的意味を検討した、室谷早苗「保育園給食における園児間の食事行為の同期性」や、人と人工的な装置との適応関係を多くの観察結果をもとに検討した、浮田基士「自覚なき感覚と行為―エスカレーターにおける降り足―」など、行動の詳細な観察を行った研究も目立っていた。

舛田ゼミの卒業論文は、「コミュニケーション」をキーワードに、実際の発話行動や、ことばの選択とパーソナリティの関連など様々な研究がなされた。土井直人「自称詞の選択に影響を与えるパーソナリティ要因について」は、丁寧な文献研究を踏まえ、最も親しい他者に使用する自称詞の違いが、パーソナリティ傾向としての他者との距離

の取り方と関連する可能性を調査によつて示した。伊藤照恵「子どもへの絵本の読み聞かせにおけるCharacter Speechの生起について」は、読み聞かせの観察を通じて、子どもへの読み聞かせが声色や抑揚に関して大人とは異なることを明らかにした。千野夏美「発話意図とその理解に矛盾を生じさせる要因について」は、曖昧な発話や身振りが聞き手にどのように解釈されるか検討し、言語情報が少なくかつ多義的な発話」が聞き手の解釈を惑わせる傾向にあることを実験的に裏付けた。廣島和也「色彩は味覚にどのような影響を与えるか―観念連合の影響の検討―」は、味覚が色彩によつて実際に左右されること、またその傾向が女性でより顕著であることを実験的に検証した。

これらの発表会には、各担当教員の三年ゼミ生、二年生以下の学生なども参加していた。このような学生間のささやかな「研究交流」が、次年度以降も継続的に行われることを望む。

(舛田 弘子)

文化領域

文化領域では一九名から卒業が提出された。漫画・スポーツなど現代文化に関わるテーマが一一名と、身近な関心から問題設定を行ったものが多い。その

他に歴史・考古学・言語学に関わるテーマが見られた。現代文化に関連する論文の多くが、自分なりの仮説を設定して文献・webやアンケート等からの資料によつて仮説の検証を行うという方法をとっている。先行研究をあまり意識せずに原資料にあたり自分なりの結論へ至ることができるが、逆に問題設定や考察自体が練りこまれていない、アンケート等の資料収集法に検討が不足しているといった傾向も見られた。一方、歴史等をテーマにした論文は、先行研究の学習不足、資料操作の訓練不足が目立った。全体的には、資料収集が不十分で、分析・考察過程の記述も不足するという傾向は否めず、結論も極めて借り物的なところに落ち着くものが多い。

しかし、自らのテーマに対する関心が高い論文は、資料収集・分析・考察も周到であり好論文となつている。桜井瑞希「堀骨碎三を読む―マンガの描く性・肉体・エロティシズム」は、既存のサブカルチャー論や漫画論なども踏まえた上で、ある漫画家の表現方法を丹念にとりあげ、手塚治虫らとの比較も交え社会的な位置づけを考察した。また、松田浩司「動物／植物に関することわざが持つているイメージの考察」は辞典に現れる

言葉を丹念に収集・分析・整理し、動物のイメージが生活文化と強く結びつくことを明らかにし、将来のイメージの変化を予測した。これらのように、自力で何かを明らかにしていく過程を楽しみながら進めることをいかに学生たちに伝えていくかが課題である。

(白杵 勲)

思想領域

今年度の思想領域では三二名が卒論を提出した。テーマは環境問題、文学、生命倫理など多岐にわたるが、なかには指導教員をも驚愕させるほどの優れた力作が数本あった。以下、好論文のいくつかを紹介する。

環境倫理学をテーマとした奥谷ゼミの卒論提出は一本あったが、このうちA評価が六本と、例年になく優れた卒論が多かったことは特筆すべきである。特に斎藤啓太「湿原と人間」と「岩崎真香「エゾナキウサギと生物多様性の保存」の二論文は、四〇〇字原稿用紙一三〇から一五〇枚の大作で、沢山の文献を駆使し、自然と人間との共生の問題に真剣に取り組んだ力作であった。また、小川陽平「環境教育の必要性」は我が国で決定的に立ち遅れている環境教育の現状とその必要性を論じた秀作であり、仲野貴裕「地球温暖

化問題とヒートアイランド現象」山崎浩平「環境ホルモン問題について」、山崎郁夫「ゴミ問題について」も、環境にかんする現代的で切実な問題を取り上げた好論文であった。

川合ゼミの卒論は文学系が六本、非文学系が四本であった。伊藤美波「向田邦子の原動力について」は、脚本家、作家として多彩に活動した向田の活力の源泉が父親と自殺した恋人からの影響にあることを、乏しい資料から地道に解明した意欲作。

高橋信吾「星新一研究」は彼の「シヨートシヨート」という形式の源泉が欧米のSFにあるとして、祖父の代に遡り伝記的な側面からも考察した佳作。また、清水康之「鬼について」は「オニ」という存在を中国や日本の習俗、仏教、昔話等から総合的に考察した野心作で、小林愛子『女人源氏物語』を通して見る女三の宮』は原作との比較検討があればと惜しまれた。

杉山ゼミでは、田中里枝「エイズの広がる社会」、田山歩「出生前診断における倫理的問題」、野崎秀介「性同一性障害」は、いずれも生命倫理について論じた論文だが、文献資料の扱いは堅実で高い評価を得た。山口一穂「死刑存廃論を振り返る」は、これまでの死刑廃止論の論拠がいかに不十分であるか

を抽出し、死刑廃止を実現するためにいかなる構想をもつ必要があるかを鋭い分析によって論じている。また、宮本沙紀児童文学における死生観」や佐藤由美の女性から見た恋愛論などは、多くの資料を使いながら自分の問題を自分の言葉で論じている点で、印象に残る好論文であった。

(杉山 吉弘)

英語英米文学科

英語英米文学科では卒論を必修にしているが、意欲的な六本の論文が提出された。

岡崎清ゼミからは、現代アメリカの商業小説家ステイヴン・キングの作品論が書かれた。千葉将嗣「Stephen King論―恐怖の四季」によるKingの魔法」は、キング作品が読者に受け入れられる理由を解きほぐす。キングは単なるストーリー・テラーではなく、人間の二面性を掘り下げ、物語形式にして読者に提示してると言う。

菅原秀二ゼミからは、二本の提出があった。住吉梨沙「イギリスの競馬について」は、イギリスがなぜ競馬の発祥の地と言われるのか。日本の競馬との相違について論じ、イギリス社会のあり方を展望した。藤江寛司「イギリスのロック」は、いわゆる

ブリティッシュ・ロックがなぜイギリス社会に浸透し隆盛したのか、その歴史的経緯と背景を探った。二本とも、自分の趣味や関心からテーマを選び、楽しみながら書くことができた。

中村敦志ゼミでは、諏佐奈緒美が「アメリカのバイリンガル教育」を発表した。アメリカでは、スペイン語を話すヒスパニックが急増し、その多くは英語を話せないまま移民してくる。彼らへの英語教育に疑問を持ち、問題が顕著なカリフォルニア州に絞って、歴史・政治・社会・文化・教育の視点から論じた。

R. D. Heitzの町村歩は、英語論文「How to Make Japan a More International Country」を発表した。日本は、宗教、人種、習慣などで単一的であるため、異文化を受け入れ難くなっている。今後いかにして国際的になり得るか、幾つかの提言を行っている。

平体由美ゼミからも英語論文の提出があった。山由香里「The Relationship Between President Bush and the Religious Right」は、アメリカのG・W・ブッシュ大統領の政治活動と宗教との関連を考察した。ブッシュの行動が、キリスト教右派の信仰に基づいており、それが政治活動にまで影響を及ぼしていると論じている。

どの卒論も、ゼミの研究成果を發展させて、自分の意見を論じている。大学四年間の集大成となっており、今後の人生に大きな自信となるだろう。在校生もぜひ挑戦してほしい。

(中村 敦志)

臨床心理学科

二〇〇五年度臨床心理学科第二期生の卒業論文発表会が、二月十三日に行なわれた。今年も昨年と同様、四年生の約半数が履修登録し、その約半分が提出に漕ぎ着けた。二十七名の学生たちには、惜しめない賞賛を寄せたい。興味深いテーマを設定し、データ採取まで行ないながら、途中辞退した学生も見られた。必修でないことの負の面を垣間見た残念な思いは、教務上の検討事項として来年度以降に活かしたいと思う。いくつかの研究を紹介しながら、本年度の発表会を振り返ってみよう。

橋本忠行ゼミの竹内恵さんは「大学生の自己開示体験に関する基礎的研究」と題した研究で、対面、電話、メールという三つの相談場面での自己開示を比較した。心理臨床的な相談の基本形態は対面であるが、旧来より電話相談、あるいは最近のメールカウンセリングのように、他の相談媒体が利用される

こともある。それぞれの媒体の特性をふまえ、相談の内容、利用の気軽さ、来談者の特性等に応じた相談活動の実現を期待させる発表であった。同ゼミの中村麗華さんは「自己防衛における自己効力感に関する実践的研究」と題する研究を行なった。防衛に関する自己効力感に関して、独自の尺度を完成させた意義は大きい。加えて彼女は、護身教育の効果的な実施についても、実証データを交え考察していた。現実への適切な介入を目指した、価値ある研究であった。

井手正吾ゼミの遠藤愛子さんは、認知症者の介護ボランティアに参加しながら、ある老婦人と継続的な交流を持ち、彼女の心的世界との接触を試みた。両者による問主観的世界の構築を基盤に、認知症者の心的世界を理解を試みた研究である。「機能が劣っている者」「処置の必要な者」という医療的介入とは異なる、心理療法的関わりが模索されていた。他にも、芸術療法の諸技法に関して、基礎的データを丹念に集めた佐野友泰ゼミの一連の発表など、目を引く研究が散見された。また二年目ではあるが、発表の内容と形式は随分本格的になっている。来年度も、高い水準の卒論が多く提出されることを期待したい。

(森 直久)

二〇〇五年度

人文学部合同講演会



第1回

二〇〇五年度の第一回人文学部合同講演会は京都学園大学人間文学部(メディア文化学科)の隅井孝雄教授をお迎えして、十月二十八日(金)の三講時を使って、S.G.Uホールにおいて開催された。二〇〇五年度より、新たに京都学園大学および松山大学人文学部と本学人文学部との間で単位互換(国内留学)制度が導入された。そこで今回は、京都学園大学の隅井教授に講演をお引き受けたい。今回の講演会は主に人間科学科と英語・英米文学科の一年生を対象として、「デジタルメディア時代の進展とジャーナリズムの新展開—インターネットの光と陰を考える」という演題で行なわれた。

当日の講演の内容は次のようであった。「二十一世紀デジタル情報時代が始まった」「果てしなく進化続けるケイタイ」「第三世代ケイタイとは何か」「テレビもデジタル化が始まった」「デジタル放送の未来」「インターネットの登場」「世界六億人に普及しているインターネット」「インターネットの光と陰」「世界中が注目したイラク青年のブログ」「デジタルジャーナリズムに向けて」「残された心の問題」である。

講演では、数多くのデータと映像を使いながら、インターネットの本格化、デジタル放送の導入、第三世代携帯電話の急速な普及と影響について、お話いただいた。例えば、難病で入院中の一人ぼっちの子どもたちをインターネットで結びつけることができるといふ事例がある一方で、イラク戦争におけるブッシュ大統領の政策を冷静に検証しつつけたニュースキャスターに対して脅迫めいたメールが殺到し、視聴率の大幅な低下を招いたという事例も紹介された。

また、新しいスタイルのジャーナリズムが芽生えていることも取りあげられた。

イラク戦争の恐怖の渦中、バクダッドの市民生活の様子を克明に発信するイラク青年のブログに多くのメディアがアクセスし、世界中の読者との対話や討論が活発に行なわれたという事例がそれである。その反面、ネット上のコミュニケーションは感情をむき出しする可能性が高いこと、仔細な感情の変化を友人と共有できるケイタイ・メールは孤独に打ち勝つ力や閉塞感を乗り越える力を養うことを難しくする陰の機能もあることについても触れられた。

(湯本 誠)

第2回



今年度は単位互換協定大学特別講義ということで、臨床心理学科では沖縄国際大学から片本恵利先生をお招きし、去る十一月一日、「沖縄の民間信仰と心

理臨床スクールカウンセリಂಗ、フィールドワークを通して見えてくること」というテーマで講演をお願いした。興味深いテーマであり、臨床心理学人間科学科の学生約一八〇名が熱心に話を傾けていた。

以前沖縄の病院を訪問した際、沖縄では精神科医に悩みごとを相談するより、ユタに相談する人が多いという話を聞いたことがある。そこでこの機会に是非ユタ(シャーマン)の話聞きたいと思っていた。

片本先生ご自身は大坂出身であるが、たまたま卒論で沖縄のユタを研究テーマとして取り上げることにになり、その後ヤンバル(沖縄本島北部地域)でスクールカウンセラーを募集していたことが縁となって沖縄で生活を始めた。最初は地域の人に私生活のことまで知られて戸惑うが、やがてスクールカウンセラーをするには沖縄の風土を理解しなければ対応がむずかしいということを確認するようになったという。ヤンバルの子どもたちは自然に恵まれて特に心理的な問題はないと思われがちであるが、現実の沖縄は、近代以前(共同体、近代(学校、ポストモダン(ネット、TVなど)

が混在し、価値観が多様化しており、不登校、虐待、出会い系サイトなどさまざまな問題が起きているという。青い海に囲まれた自然豊かな島というイメージをもっていた学生にとつては、意外だったようである(自然環境が破壊されている様子もスライドで紹介してくれた)。

テーマである民間信仰については興味深い話を聞くことが出来た。沖縄のシャーマンは神人(カミンチュ)と呼ばれ、ノロ、ツカサなど部落共同体の祭祀を司るものと、ユタという個人の悩みを聞いたり、家族の運勢や行事の日取りを占うものがあるという。日常生活では、今もなおユタにうかがいを立てる人がいる。しかしシャーマンは命がけで仕事をしていたが、最近はいりどころとなる共通の価値観が失われ、衰退気味であるとのこと。そんな話からカウンセラーのよりどころは臨床心理学という学問であることや、まぶしい(魂)に触れるカウンセラーの重要性について話された。臨床心理学科の学生にとつては、改めて心理臨床とは何か、考えるよい機会になったのではないかと感じる。

(滝沢 広忠)

卒業生の動向 大学院進学者および合格者(2006年度分)

Table with 5 columns: 氏名, 学科, 卒業年, ゼミ教員, 進学先及び合格. Lists graduates and their postgraduate studies.

2005年度学部教員の人事、研究活動等 (10/154/1)

◎教員の異動

▼退職(三月三十一日付) 徳田 仁子 (教育心理学臨床I)

●採用(四月一日付) Thalawyn Silverwood (英語)

●教授(特任) 虎尾 剛哉 (障害児教育学概論) 兵庫教育大学大学院修士課程修了



●教授(特任) 眞柳 義一 (音楽I・II) 北海道学芸大学釧路分校卒業 札幌市立北陽



●教授(契約特任用) 市川 啓子 (スクールの理論、臨床心理学的領域援助論) 東北大学大学院教育学研究科修士課程修了



北海道大学保健管理センター 非常勤講師他

●講師 西 真木子 (イギリス文学) イギリスレスター大学大学院博士課程英文科 修了 札幌南高等学校教諭



●講師(外国人教師) Andrew Clark Johnson (英語) ヴァージニア州立大学大学院修士課程修了 立命館大学常勤講師

◎長期在外研究員

●平体 由美 ○五年十月一日〜○六年九月三十日 アメリカ合衆国ノースカロライナ州立大学 チャペルヒル校 アメリカ南部研究所

●松川 敏道 ○五年十月一日〜○六年三月三十一日 イギリス リーズ大学社会政策学部

◎海外研究出張

●臼杵 勲 ○五年十月十三日〜十月二十七日 ウラジオストク 「科学研究費による遺跡調査」

●滝沢 広忠 ○五年十月二十三日〜十月三十日 南アフリカ 「第三回聴覚障害と精神保健の世界会議出席」

●RD・イデ ○五年十二月十五日〜○六年一月九日 イ

タリア他 「ゼミナール等海外研修及び研究調査」

●川瀬 裕子 ○五年十二月二十八日〜○六年一月八日 イタリヤ他 「現代劇作家ピランデッロ研究の為の資料収集他」

●富田 充保 ○六年二月十七日〜二月二十五日 イギリス 「研究促進奨励金に基づく調査・資料収集」

●臼杵 勲 ○六年三月十三日〜三月十七日 モンゴル 「科学研究費による研究資料の調査、次年度調査の打ち合わせ」

●奥谷 浩一 ○六年三月十六日〜三月二十三日 韓国 「朝鮮通信史の資料と史跡に関する調査」

◎在宅研究員 ●奥田 統己 ○五年十月一日〜○六年三月三十一日 「アイン語静内方言の文法研究」

◎出版物 ●佐野 友泰 (分担執筆) 『心理学A to Z 基礎から臨床まで』原千恵子編、学苑社 二〇〇五年十月二十日 一八四頁 二四〇〇円+税

●杉山 吉弘 (単訳) 『生命科学の歴史-イデオロギーと合理性』ジョルジュ・カンギレム著、法政大学出版局(四六版叢書

(ウニベルシタス839) 二〇〇六年三月十日 二四一頁 二八〇〇円+税

◎委嘱発令 ●片桐 元恵 江別市社会福祉審議会委員(江別市長) 〇六年十月

●菅原 秀一 R2510築国際親善奨学金委員会ロータリー奨学金選挙委員(ロータリー財団R2510地区) 〇五年十月〜○六年十月

◎研究助成 ●松本伊智朗 日本学術振興会科学研究費 現代日本の「貧困観」に関する実証的研究(共同研究者) 三〇〇万円

●松本伊智朗 厚生労働科学研究費 要保護児童の社会的自立支援に関する研究(分担研究者) 一五四万円

編集後記

こども学科新設の準備を経て人文学部も新たな時代に向かいます。広報活動ではそれぞれの学科の特徴を生かしつつ実習体験から学ぶという人文学部共通のコンセプトを確認することもできました。貴重なご意見や情報提供また記事をお寄せご協力いただいた教職員の皆様へ感謝しています。(U・S・T・M)